

情報行動としてのスタディ・スキルに関する諸側面 －教育実践の結果から－

Some aspects of study skills as informational behavior
－ An educational practice －

大倉 恭 輔
生活福祉学科准教授

Keywords : study skills, academic, skills informational behavior, first year experiences, curriculum, university and junior college

1. はじめに

1990年代以降、わが国の大学教育において、初年次教育/導入教育およびスタディ・スキル/アカデミック・スキルへの着目・言及が多くなされるようになった。また、そうした名称の科目群を教育課程に組み込む大学が増加してきている。

初年次教育は1970年代以降のアメリカで発達したものと見てよい。ただし、アメリカとわが国では、少しく背景が異なるとされている。アメリカの初年次教育の主眼は、学力や動機づけなどが異なる進学者層への対応にある。これに対し、わが国の初年時教育は、少子化対応としての入試の多様化および平易化の影響から論じられることが多い。とはいえ、進学者層の質的变化や「大学のユニバーサル化」への対応という点において、両者が共通の課題を有していることには変わりがない。

また、初年次教育をカリキュラムに組み入れるにあたり、具体的な「学び方」としてのスタディ・スキルについても論じられるようになった。これにともない、スタディ・スキルに関するガイドブックの出版点数も増加傾向にある。アメリカの場合、一般的なものだけでなく各学問領域に特化したスタディ・スキルに関する書籍も少なくない。そうした状況に、わが国も少しずつ追いついてきたことは、学生にとって望ましい変化といえる。

しかしながら、わが国の初年次教育やスタディ・スキル教育の充実のためには、検討すべき点も多く残されている。「全入時代」の高等教育における初年次教育およびスタディ・スキル教育の方向性を探る手がかりを求めることは、今日、もっとも急がれる作業となろう。

そこで、本稿では、ひとつの教育実践をとおして、スタディ・スキル教育における問題点の確認をおこなう。そして、それらの問題を解決するための方策について、若干の考察をおこなう。

2. 本学におけるスタディ・スキル科目の導入

1991年の「大学設置基準の大綱化」を契機とし、多くの短大/4大が「一般教養課程」を廃止した。本学でも、1993年/平成5年度から「一般教育課程」に代わり「総合教育科目」を設置し、あらたなスタートを切った。とはいえ、発足して数年間は従来のカリキュラムと大きく異なる部分はなかったといってよい。

本学の「総合教育科目」が大きく変化したのは、2000年/平成12年度からである。そこでの変更点は、次の4点にまとめることができる。

01 人文科学・社会科学・自然科学という3系列による科目分類の廃止

* 現代的ニーズおよび本学の教育理念にもとづく新科目分類の導入

02 情報系科目（コンピュータ技術I）の必修化

03 日本語科目（日本語表現法）の新設・必修化

04 アカデミック・スキル獲得を目的とする科目（学問への招待）の新設・必修化

当時、総合教育委員としてカリキュラム改編に携わっていた大倉は、以下の提案をおこなった。大学（短大/4大）での学びは、高校までのそれと異なる部分を多く有する。このとき、教員はふたつの側面に留意する必要がある。ひとつは「大学での学び」の本質的な部分に着目させることであり、もうひとつは学びのスキルを獲得させることである。大学のユニバーサル化を迎えようとするとき、そうした側面を教授するスタディ・スキル科目をカリキュラムに導入することの重要性はより高まるものと考えられる。

同委員会は、検討の上、この提案を受け入れた。そして、大倉が基本的な授業内容の骨格を作成することとなった。しかし、スタディ・スキル科目の必要性についてはおおむね理解が得られたものの、その運用方法については問題点があったことも事実である。その代表的な部分として、全学対象の総合教育において、共通化した教授内容があり得るかという問題をあげることができる。

当初の計画では、各学科の教員が他学科のクラスを担当することによって、学問の多様性や着眼点・方法論の相違を提示することを目的としていた。これは、導入教育の視点から提案されたものであった。しかしながら、制度上の問題などからそうした方式はおこないえず、それぞれの学科教員が所属学科の学生を担当する形式をとることとなった。このことは、当該科目が「初年次教育」ではなく、各学科での「研究法」の授業に相当する位置づけに変化したことを意味するといってよい。

そのためもあって、総合教育における当該科目は2005年度をもって終了することとなった。その後の取り扱いは学科によって異なるが、1年次に開講される「基礎演習」に移行するケースが多い。

履修年限の短い短期大学において、現状のような方式に利点があることはいうまでもない。しかし、入学者において、大学（短大/4大）で学ぶことへのモチベーションや理解度に大きな変質が生じていることも事実である。紙幅の関係もあり本稿では詳述しないが、各学科での教授内容・方法の再検討とともに、全学を対象としたスタディ・スキル科目が有する可能性について、再考

される余地はあろう。

3. スタディ・スキル科目構築の根拠

「学問への招待」が構想された当時、学びに関するガイドブックが存在しなかったわけではない。しかし、その多くは「レポート・卒業論文の書き方」に関するものであった。そして、大学（短大/4大）での学び方全般にわたる「学びの意義」と「具体的な方法」について学べるものは、2000年代に入ってからのもものがほとんどである。（注1）

たとえば、社会的にも注目を浴びた船曳らの「知の技法」は、一般的な新入生がガイドブック/マニュアル的に使うことを意図していない。同書の特徴は、今日の諸学の動向について触れることで、いわば「学問のあり方」についての興味を喚起しようとする点にある。すなわち、学問への動機づけと視野を与えようとするものである。

同書は初年次教育におけるテキストとしてあらたな方向性を示したものである。しかし、実際の学びにおける具体的なテクニックを得ようとするには、それに関する別のテキストを併用しなければならない。読書習慣が形成されていない近年の入学者にとって、それは大きな負担となることが予想される。

こうした状況の中、大倉は認知心理学およびコミュニケーション論的視点を援用することで、スタディ・スキル科目の教授内容を構成することとした。すなわち、モノゴトの認知/理解は情報処理のプロセスであること、および情報行動が「収集/input・整理/processing・発信/output」の3つの部分から成立することへの着目である。

教育が「教授－学習」過程であり、一種のコミュニケーション行動であるという考え方は、教育学・教育工学・教育社会学などの領域では一般的なものである。また、記憶・学習のメカニズムを情報処理という枠組みからとらえ直すことにより、ヒトの理解のあり方にあらたなパースペクティブを与えた認知心理学は、さらに表現/情報発信のスキル習得についても具体的な指針を与えている。（海保 1988） 学ぶこと/わかることとそのための営みを、そうした視点からとらえ直し教授することは、スタディ・スキルの各構成要素をひとつの流れとして学生に意識させる効用があると考えられる。

また、前項で述べたように、当該科目は各学科の専任教員がそれぞれ所属の学生を対象に講じることになった。そこで、生活福祉学科の学生への教授内容・方法については、社会科学系の学際領域という特徴を理解させる工夫が求められる。

その結果としてまとめられたのが、下記のシラバスである。（表1）

以下、「ノートテイキング・自校教育・学問間の連関・レジュメ作成」の4点を中心に、大倉が担当した「学問への招待」の授業実践の報告をおこなうとともに、それによって明らかになった問題点について述べる。

4. 授業内容 01: 大学および大学教員の特徴とノートテイキング

大学（短大/4大）は、制度としてまた実際の運用において、高校までのそれと大きく異なる。

兄弟姉妹などから大学での学びについて聞いている場合はのぞき、多くの学生は、はじめて大学での授業に臨むことになる。そこで、授業内容についての説明に先んじて、高校までの学びと大学での学びにおける相違点を理解させることが必要となる。

こうした点については入学式後のオリエンテーションである程度の情報が伝達されるが、ここではノートテイキングとの関連でいくつかの話題を提供する。なお、ノートテイキング自体は「情報の整理」に属する部分だが、授業の運用上、初回講義時に意義や技法を講じている。

01 教員の授業スタイル・講義内容が多様であること。

- * 板書の多寡は単なる個人差ではなく、各教員の教育に対する考え方の反映であること。
- * 聞きながら理解すること・書きながら理解することを同時におこなう必要があること。

02 ノートは必ずとること。

- * ヒトは必ず忘れる動物であるため。
- * 聞いただけでわかったつもりにならないため。

03 板書を書き写したものは「ノートではない」こと。

- * ノートは「理解のための道具」であること。
- * 後から読み直して、(試験の時などで)役に立たないものはノートではないこと。

教員の授業スタイルについては、高校までも同様であり、学生は一定の理解を有している。しかし、ノートテイキングについては、ほとんどの学生が板書の書き写しから脱却できていない。(注2)本講義では「わからない部分」に「？」マークをつけることから始めることをすすめているが、そうした作業自体も困難なようである。筒井は、学生授業評価で「大事なところは色を変えて板書してほしい」と回答した学生が83%にのぼったことに対して、次のように述べている。(筒井2006)

学生が『大事なところ』の見極めを、学生が論理内在的」には行っておらず、「論理の流れ全体が追えない(論理の流れ全体を追うという動作を知らない)」ために、「信号やサイン(チョークの色や教師の表情、「ここが大事だ」という注意喚起)という外在的なものに依存している」実情にあること。また、「ノートをとるという行為に人々が認める効用は、誰しもによって発揮されるわけではない」ことに留意する必要性を述べている。

そして、『いかにノートをとるべきか』の指南ではなく、『大学での学びのレディネス』をつけさせること・高めることが必要であると結論づけている。

筒井の論には首肯できる部分が多いが、半期の授業内で、レディネスの部分とテクニックの部分をどのように配分するかは、さらに検討が必要となろう。

5. 授業内容02：自校教育と学問の社会的背景に対する理解

いかなる学問領域でも、社会的・文化的背景からは無縁ではない。ことに、広義の福祉系学科である本学科では、そうした側面への着目を促し問題意識を高めることが重要な作業となる。同時に、個々の学問の特性とそれらが有機的に連関していることへの着目も促進されなければなら

ない。

たとえば、漠然と「カウンセリング/カウンセラー」への興味を有する学生に対し、狭義の心理カウンセリング以外の方向性・職種が存在することを教示することをあげることができる。「臨床心理士」についてはある程度の知識を有している学生でも、「精神保健福祉士」については知らない。すなわち、医学・心理学・ソーシャルワークがそれぞれに連関し協同して心身や家族の健康維持に関与している構図を提示することは、入学後の学びの方向性や力点を決定づける上で、重要な作業となる。

本講義では、学問と社会的背景の関連について、「女子大・女子短大」の成立経緯を例にとっている。これは、自分たちが入学した場所が「女子短大」であることから、まずは身近な例をもって考えさせるためである。実際には、学生の受験校（学部・学科）の選択時の経験を聞き、そこから「女子大・女子短大」特有の学部・学科構成に気づかせることから始めている。（注3）

すなわち、従来の「女子大・女子短大」においては「家政学部・文学部」の2学部構成が多いこと。逆に、共学校では「家政学部」が存在しないこと。この2点を確認することで、学びの場自体が社会的要請や常識の枠内にあることを理解させようとするものである。さらに、わが国のアカデミズムにおける象徴的な存在である東京大学において、社会福祉学科が存在しないことを指摘し、その意味を考えさせている。

学問は世界やモノゴトに対する好奇心から発生するものである。しかし、その学問を教授する場において、そうした跛行的な状態が存在することを知ること。それは、わが国の女子教育の歴史を知ることにつながり、さらには女子短大/女子大に入学した学生のアイデンティティ形成に必要な作業であると考えられる。同時に、男性優位社会において女子教育の確立に努力してきた女子短大/女子大自身のアイデンティティ維持の上からも、いわゆる「自校教育」の重要性には言をまたない。

しかしながら、カリキュラムに自校教育を導入するには、教授者/当該校側での相当の準備が必要である。（注4）

それは、自校の通史的側面だけでなく、他校との比較を含めた自校の教育への多角的な検討・評価という作業をとらなうものである。そうした評価の基本的な部分は全学的な Faculty Development の一環としておこなわれることが望ましい。加えて、当該校の長所のみを講ずるような授業では、学生にとって有益な時間にはならないだろう。

本講義では、下田歌子の業績に触れるとともに、津田梅子と津田塾（大学）の例を挙げた。家政学部を有する女子大と有さない女子大があること。それが、創立当時の社会的背景の中で、それぞれの学校が、女性に何を教え何を身につけさせたいかの方向性の違いに起因するものであることなどである。

しかし、明治期以降の女性の社会的地位や女性の高等教育への希求などについて説明し、さらにそれらが今日的な問題であることを具体例をもって説明するものの、学生の反応を高めることは困難であった。それらは、就職などの卒後の進路に直結する話題でもあるとはいえ、新入生にとってはリアリティに欠けるためと解される。また、学科の教育目標に関連するものの直接的な

専門科目ではない授業において、100年前の社会的状況について理解させることも、同じくリアリティという点で困難な部分がある。

大倉は、年度ごとに資料やエピソードを変えてみたが、大きな効果はみられなかった。教材研究および授業方法について改善の努力は必要であるが、こうした問題提起については、一授業内で完結することよりも、他の授業への道筋をつけるという程度に考えておくことも必要と思われる。

6. 授業内容 03：学問の多様性と連関に対する理解

学問世界の広がりや相互の関連性を知ること、さらに方法論の相違について理解させることも導入時教育においては重要なポイントである。ことに学科のあり方自体が複合的・学際的な性格を有する場合、それは不可欠な作業となる。

本講義では、一般的な「人文・社会・自然」という分類について述べるとともに、学問世界が社会の変化に対する対応のあらわれとしての「学際領域」について概略をしめし、さらに橋爪の分類を利用して、社会科学を俯瞰した。

社会科学 … 「社会」を研究する学問の総称

経済学 企業の行動を研究 … 貨幣による関係

売買の関係による企業や家計のつながりを研究

法学 裁判所の行動を研究 … 法律による関係

人間が法にもとづいて行動をコントロールする現象全体を研究

政治学 政府の行動を研究 … 権力の関係

行政・議会・世論・マスコミなどのメカニズムを研究

社会学 人間と人間の間を研究 … 関係全般を扱う

「社会」（複数の人間の集まり）を対象とし、そこで人々が結び結ぶ

関係のあり方を研究 → 守備範囲が広い

(橋爪 1993 をもとに大倉が整理)

橋爪は、社会科学の個々の学問分野を単体で説明することはしていない。そうではなく、「行動」と「関係」というふたつの次元から整理・比較することで、それぞれを特徴づけるとともに社会科学と呼ばれる領域がどのように構成されているのかを理解させようとしている。その上で、大倉はふたつの例を挙げた。

ひとつは、学生にとってもなじみ深いポピュラー文化である。たとえば、ポピュラー音楽は今日の社会において「メディアをとおして商品として流通するもの」として定義される。このとき、企業としての音楽産業だけでなく、それを購入する側の消費支出もまた経済学の対象となること。文化的生産物としての音楽が、著作権法という法律のもとで保護され、それによって作者の権利が守られるシステムができあがっていること。音楽/音楽家が時として政治的な運動に関与し（あるいはさせられ）、それが故に権力との関係が露呈する場合があること。さらには、音楽そのものが人と人を結びつけ、コーホート集団として機能させる力を有すること。(大倉 1994)

もうひとつは、生活福祉学科という複合的な学びの場の説明である。われわれの家庭や生活を、さらには福祉を理解しようとするとき、上述のポピュラー文化と同様に、社会科学諸学との深い連関を有することを例示し、そこへの着目をうながした。

こうした説明は初学者にはなじみのないものといえるが、社会的な事象に関する学問的な接近の枠組みを理解する上では欠かせない作業である。同時に、ある分析軸をもちいることによって複数の事象（この場合は学問分野）の連関を分類することは、その後の学びにおいても重要なスキルとなる。

本稿では触れないが、以降の授業において「尺度」と「分類」について講じ、簡単な作業を課している。具体的には、「実践女子短期大学のしくみ」を図示させるものである。あらかじめ、モノゴトが部分から成り立っていることに気づかせ、組織のようなシステムもまた部分の集合体であることをしめす。そして、「施設による分類」（校舎・体育館・食堂など）・「人的・職種上の分類」（教員・職員・学生）・「組織構成にもとづく分類」（学科・事務部など）といった例を挙げ、さらに「上位・下位分類」（学科ーコースなど）について示唆する。また、学生手帳やキャンパスガイドを参照するよう指示を与える。

しかしながら、そうした具体例をしめしても、論理的・多面的に構成を図示できる学生はいない。たとえば、学生組織の存在に気づいた学生でも、同好会名を羅列し他の学生組織の構造図とのバランスが失われている例が散見される。これらは、新入生であるために自校の組織について知識が不足しているというよりも、分類に関する基本的なスキルの欠如とみなされよう。

ここでの授業の眼目のひとつは、「関係と行動」という分析軸で社会科学諸学とその対象を並列させるとともに全体構造を俯瞰することにある。個々の学問の特徴と他の学問分野との連関、さらには本学科で学ぶべき社会事象や問題の複雑性・多様性については、その後の学びの場で徐々に理解すればよいことである。だが、本講義での経験は、学問の多様性と連関に対する理解以前に、解決すべき問題のあることを示唆していると解される。

7. 授業内容 04: 情報発信行動としてのレジュメ作成

学生は、学びの場において「情報の受信者」となることが多いが、発信者でもあることはいうまでもない。本講義では、授業時・後での質問も学生からの情報発信であることや、ゼミ/演習では学生同士に送・受信者としての積極的な関与が求められることが伝えられる。

同時に、成績評価のためのペーパーテストやレポートも、情報発信行動であることを理解させるようにしている。すなわち、それぞれの科目担当教員に対し、学生自身がどれほどの理解にいたったのかを伝達する行為であり、そこでは内容とともに表現の形式や技法が求められることを強調している。

そうした情報発信行動に関する技法のひとつとして「レジュメ」の存在をあげることができる。だが、学生のほとんどがレジュメという用語自体を知らず、授業時の配付資料との区別もついていないのが実情である。そこで、下記のようなレジュメの説明から始めることになる。

レジュメ＝伝えたい内容をひと目でわかるようにしてある資料。

ひとまとまりの情報のエッセンス → 皆で考えるための道具
何故「ひと目」か？

レジュメは議論のための道具・討議をスムーズに行うためのみちしるべ。

レジュメ自体を理解するのに時間をとっては、議論の時間がなくなる。

レジュメの枚数・書式

2－4 ページ程度に収める。(A4判用紙か A3判用紙で見開きとする)

場合によっては、データなどの資料を別にそえてもよい。

全体をとおして、箇条書きか短い文にする。

基本的な内容と構成

- 1 ゼミ名・発表日時・発表者名・発表タイトル
- 2 要点 ← 大項目はあまり多くしない。
- 3 他の意見・文献紹介
- 4 各論点の長所・短所 ← 何を長所・短所とするかは、ゼミ生で皆違う。
- 5 討議のポイント（疑問点など）
- 6 その他

最終行に「以上」と入れるとよい。← レジュメがそこで終わりであることをしめす。

ページ数を入れる。← ばらけてしまったときにも手がかりとなる。

その上で、過去の学生が作成したレジュメのコピーを配布し、具体的なイメージを喚起させた。その際、まとめ方の程度の異なる3種を用意し、それぞれの長所・短所についてコメントを加えた。(図1) なお、これらのレジュメは「1年次前期で受講した任意の講義科目を要約する」という課題にもとづいて提出されたものである。

ほとんどの教員は、それぞれの授業をしかるべき基準/骨格にもとづいて構成している。故に、講義内容を適切にノートテイキングしていれば、レジュメ作成に大きな困難はないはずである。たしかに、半期にわたる授業の内容を見開き2－4ページに収めることは、初学者にとまどいを与えるものである。

しかし、本講義での目的はレジュメの完成度を求めるものではない。レジュメというものが、自身の理解のあり方をしめす情報発信行動であり、同時に他者間との理解を深化させるためのコミュニケーションのツールであることを学ばせる点にある。

ただし、本講義では、ある時点から成績評価をレジュメでおこなっている。これは、近年の入学者における学力低下への対応という側面もあるが、むしろレジュメ作成能力の向上がその後の学びの基礎として有用であることに気づいたためである。(視点を変えれば、レジュメに肉付けをおこない、地の文で書き起こしたものがレポートとなる) また、それによりレジュメ作成に関連する説明の時間・教材を増やすこととした。

たとえば、「情報の整理」に関する授業時に紹介した「KJ法」「連想法」について再度の説明を

おこない、レジュメ作成のヒントとすること。(図2) 限られたスペース内で情報量を増やしかつ見やすくするために、図表を資料ページに一括掲示すること。1行スペースを設けることを恐れないことなどである。

コミュニケーション・ツールとしてのレジュメにおいては、レイアウトなどの見栄えについても注意が必要である。藤田の指導例では、「字間・行間・マージン」についても言及している。(藤田 2006) これは大倉も指導していることであるが、ワープロ・ソフトの書式設定について知らない学生も散見されるために、予想外に授業時間をとられる場合があった。

前項で指摘したように、ほとんどの学生は分類という作業のための能力を欠いている。しかし、それ故にこそ、レジュメ作成のスキルの向上は、その後の学びの基礎として重視されるべきものと解される。

8. まとめと今後の課題

本稿は、情報行動の視点から構築されたスタディ・スキル科目に関する授業実践とそこから得られた若干の知見についての報告および考察である。紙幅の関係から、「ノートテイキング・自校教育・学問間の連関・レジュメ作成」の4項目に焦点をあてた。

ノートテイキングについては、疑問点をマークする程度の作業でも困難な学生が多数存在しており、理解のための道具としてのノート作成スキルの習得以前に解決すべき問題があることを示唆した。

自校教育については、わが国の高等教育と女性の社会的地位との関連と歴史性について、学生にリアリティを与えることの困難性を指摘し、さらに、Faculty Development との協同性が必要であることを示唆した。

学問間の連関や研究対象の多様性の理解については、その後の学びの中で得るべきものと考えられる。しかし、それをなすためには、尺度と分類に関する知識およびスキルの形成のための訓練が必要であることを示唆した。

レジュメ作成については、情報伝達における形式/書式の理解の必要性に加え、読解力および情報伝達能力の育成の両面においてレジュメ作成のスキル形成が寄与する可能性について示唆した。

短期大学におけるスタディ・スキル教育は、短大教育における従来からの論点を引き継ぐ部分を有しているといつてよい。すなわち、学校教育法における「深く専門の学芸を教授研究し、職業又は實際生活に必要な能力を育成すること」という双軸の教育目的を、2年間でどのように具現化していくかという点である。

多くの学生が2年後に就職する実勢に鑑みれば、スタディ・スキル教育を職業教育などに即したかたちで運用することも考えられよう。また、初年次からの専門教育の困難性から、初年次教育を重視・拡大する傾向も統計から明らかになってきている。(山本 2001)

しかし、基礎的な学習態度や学力がどのようなものであれ、入学者たちはなんらかの学問領域への関心を有して学科選択をおこない、また授業の多くはいわゆるアカデミズムの枠組みにおいて実施されている。なによりモノゴトに対する学問/科学的な視点や態度の育成は、卒業後にどの

ような進路をとるにせよ必要なものであると考えられる。

また、短大に限らないが、初年次教育/スタディ・スキル教育をどのような形態で運用するかという問題も残されている。山田は初年次教育においてディスカッションやグループ学習の有効性を指摘している。(山田 2006)

しかし、スタディ・スキル教育の講義的側面に加え、そうした少人数制での授業運営をすべての教員が一定のレベルでおこなうためには相当の準備が必要となろう。

言い換えるならば、初年次教育/スタディ・スキル教育は、学生に何を教授するかと同時に、教員が学生とともに何を作り出せるかが問われる課題なのだといえよう。

注 1

大学(短大/4大)での学び全体に関するガイドブック的なものとしては、溝上や中島らによるものなどがある。中でも、学習技術研究会のものは関西国際大学共通教育における教科書として開発されたもので、技法について具体的に記述されたテキストである点に特色がある。東谷のものは成城大学共通教育科目での指定図書として開発されたものである。マニュアル的側面はやや薄れるが、初学者に対し、学びの意味と技法の結びつきについて理解させようとする点に特色がある。

注 2

視聴覚教材を利用した授業時においても、ノートテイキングが必要であることを講じているが、実際にそうした行動にいたる学生は少数である。

注 3

最近では、進路指導担当教諭からの示唆で受験校を決定するケースも多く、学部・学科構成についての質問に回答できない学生も増加している。

注 4

寺崎は「自校教育」に関するシンポジウム報告において、以下のように指摘している。

自校教育は教養教育の意義と機能をもつと考える。さらに言えば、「居場所」の確認という作業を通じて「自分自身を作り上げる」という「教養」の基盤を提供する(第1層)。と同時に、「ものの見方の手がかりを先人の生き方に求める」ことを「歴史」の学習を通じて深めることができる(第2層)。その2層の教育を通じて、自校教育特に自校史教育は、「歴史学習を通じての教養教育」という性格をもつと考えるのである。(寺崎 2005)

自校教育における歴史的側面の教授をどの程度の割合とするかは諸説あろう。さらに、そうした2層構造の教育内容を実際の授業に反映させるためには、全学的な取り組みが求められよう。

Reference

- アエラ・ムック 2004 勉強のやり方がわかる。 朝日新聞社
- Fry, Ron 1996 金利光 訳 アメリカ式 ノートのとり方 東京図書
- 藤田哲也(ed) 2006 大学基礎講座 改増版 北大路書房
- 学習技術研究会 2002 知へのステップ くろしお出版
- 葉口・河田・ウスビ 2007 知のリテラシー・文化 ナカニシヤ出版
- 橋爪大三郎 1993 「社会学概論」 『わかりたいあなたのための社会学・入門』 宝島社
- 実践女子短期大学 2005 講義概要
- かいきよみち 1900 やさしい情報整理学 社会思想社
- 海保博之 1988 こうすればわかりやすい表現になる 福村出版
- 1992 一目でわかる表現の心理技法 共立出版
- 加藤秀俊 1963 整理学 中央公論社
- 木下是雄 1994 レポートの組み立て方 筑摩書房
- 小林康夫・船曳健夫(eds) 1992 知の技法 東京大学出版会
- 東谷護 2007 大学での学び方 劉草書房
- 筒井美紀 2006 ノートをとる学生は授業を理解しているのか? 現代社会研究 vol.9 京都女子大学
- 溝上慎一 2006 大学生の学び・入門 有斐閣
- 中島祥好・上田和夫 2006 大学生の勉強マニュアル ナカニシヤ出版
- 大倉恭輔 1994 「音楽に対する興味・態度研究における方法と可能性」 稲増龍夫(ed) 『現代の若者と音楽』 アフィニス文化財団
- 阪田せい子・Larke, Roy 1998 だれも教えなかった論文・レポートの書き方 総合法令
- 佐藤・横山・湯川・近藤(eds) 2006 アカデミック・スキルズ 慶應義塾大学出版会
- 田中共子(ed) 2003 よくわかる学びの技法 ミネルヴァ書房
- 寺崎昌男 2005 「司会のあとで」 『シンポジウム・「自校教育」の意義とその可能性を探る』 立教大学
- <http://www.rikkyo.ne.jp/%7Ez3000064/gp/symposium/index02.htm> (最終アクセス日:2007.11.25)
- 梅棹忠夫 1969 知的生産の技術 岩波書店
- 山田礼子 2006 「一年次・初年次教育を学生の観点で考える」 有本章・北垣郁雄(eds) 『大学力—真の大学改革のために—』 ミネルヴァ書房
- 山本以和子 2001 日本の初年次教育(導入教育)の現状 ベネッセ教育総研
- <http://benesse.jp/berd/center/open/report/kyoikukaikaku/2000/kaisetu/syonenji.html> (最終アクセス日:2007.11.25)

表1 「学問への招待」シラバス(抜粋)

<h1>学 問 へ の 招 待</h1> <p>— 勉強のしかたを学ぶ —</p> <p>(1年 前期 2単位)</p> <p style="text-align: right;">大 倉 恭 輔</p>
--

授業のテーマ・目標

皆さんは、小さな頃から「勉強しなさい」と言われ続けてきました。けれど、具体的な勉強のしかたをどれほど教えてもらったのでしょうか。しかも、大学(短大・4大)での勉強は、高校までのものとは内容や方法が異なります。もしかすると、中学や高校の先生に教わったこととは、正反対のことを求められるケースがあるかもしれません。

この授業では、実践的な「勉強のしかた」の基礎を学ぶことを目的としています。そして、その基礎の上に立って、「学問的な態度」を身につけることと同時に、社会に出てから役に立つ、「モノゴトの見方・考え方・処理のしかた」を身につけることも目的としています。

ちょっとしたコツを身につけておくことで、勉強の効果が大きくあがることを知ってください。そして、短大での2年間を有意義なものにしてください。

授業の内容

- 01 情報行動としての学び…informationとintelligence
- 02 学問の多様性と方法論の違い…「科学的」って、どういうこと?
- 03 情報の収集1: 図書館とは何か…ここからスタート
- 04 情報の収集2: 図書館・書店の使いわけ…図書館も万能ではありません
- 05 情報の収集3: 本の機能の理解と利用…「道具」としての本
- 06 情報の整理1: ラインと書き込み…「道具」を使い込む
- 07 情報の整理2: 分類とは何か…「食べ物」と「食べられるもの」
- 08 情報の整理3: カード化…手を動かしましょう
- 09 情報の発信1: 書式について…誰のために書くの?
- 10 情報の発信2: 文章作成…短く短く
- 11 情報の発信3: 文章構成…レポートなんか恐くない
- 12 まとめ

※ 授業はおおむね上記の順番で行われますが、番号と開講週は一致しない場合があります。

b. レジューメ例 02

人間関係論演習 B

2002.5.21
報告者

— 生まれながらにして、男であり、女であるのか —

1. 「らしさ」

- ・ 一般的な「らしさ」とは?
- ・ 「男らしさ」「女らしさ」とは?
性の役割分業 → 文化によって作り上げられた社会的役割期待の体系

2. 男女の違い

性の差づけ → 性に基づく、具なった期待がある
↓
現実の違いとなって表れる。

性役割の習得過程

- ・ 「文化的伝達」
- ・ 「個人的学習」
 - a. 社会的学習 (外的動機づけ)
 - b. 認知的發展 (内的動機づけ)

3. 振る舞い方

思春期に起こる性的成熟が自己意識の覚醒を促す。

↓
思春期の女子が女であることを受容できない。

- 理由
- ① 性的成熟に伴う周囲の目の変化 → 苛立ち・戸惑い → 否定的感情
 - ② 自分自身の「らしさ」の認知に関係

伊藤裕子 大学生の見る「男らしさ」→ 道義的役割 (T・パ・ソンス)
「女らしさ」→ 表出的役割

↓
ただ、「男らしさ」の中に「やさしさ」を求めはじめる。

性役割に対する青年の見方の変化

- ① 中学生段階 → 性役割のステレオタイプ
- ② 中・高・大 → 性に差づけされた方向を認知
- ③ 自身の性役割観の変化 → 男…男性性の価値を高め、女性性を低く位置付ける。
女…女性性の価値を高めるのは高校生までで、次第に男・女性性の双方を自己の価値観に受け入れる。

なぜ、女性が自己の女性性を高く位置付け、受容できないのか。
それは…
「社会的適応性」があるから。
・ 性役割の期待と性役割観のズレ
↓
結果として、成功回避動機が生まれる。特に、特定の男性との関係において

4. 自分らしく生きる

- ・ 「男らしさ」「女らしさ」に関して「保守的」な青年
なぜか…
異性を強く意識するが、異性との具体的な交渉をもたない時期だから。
↓
異性を理想化し、異性から期待される自己像を持つとする。
「ありたい自分」「(異性に) 望まれる自分」との間のギャップ

・ 作働性と共同性の統合

明治以来の産業革命に始まる、人々の暮らしの変化。
それに伴い…
男女の役割関係も変化。
↓
男性性と女性性を兼ね備えたアンドロジニーの方が、適応的であるといわれる。

D. ベイカン 「人間の基本的な課題は共同性によって作働性を和らげようと努めること」



・ 不明点を自分なりに調べた結果
・ 参考文献
o ありと good!

以上

c. レジューメ例 03

2001年7月24日 生活福祉学科 0126 子

ファッション文化史レジューメ

ファッション文化史 一色と形の遊び

(授業内容)

I ヨーロッパ

1 古代

- ◆ 古代ギリシャ
- ◆ 古代ローマ

2 中世

- ◆ ロマネスク
- ◆ ゴシック

3 近世

- ◆ ルネサンス
- ◆ バロック
- ◆ ロココ

4 近代

- ◆ フランス革命
- ◆ アンピール
- ◆ ロマンチズム
- ◆ アル・ヌーボー

5 現代

- ◆ アル・デコ
- ◆ オートクチュール

II 日本

- 1 平安時代
- 2 江戸時代
- 3 近代

(学んだ事の中で興味深かった点)

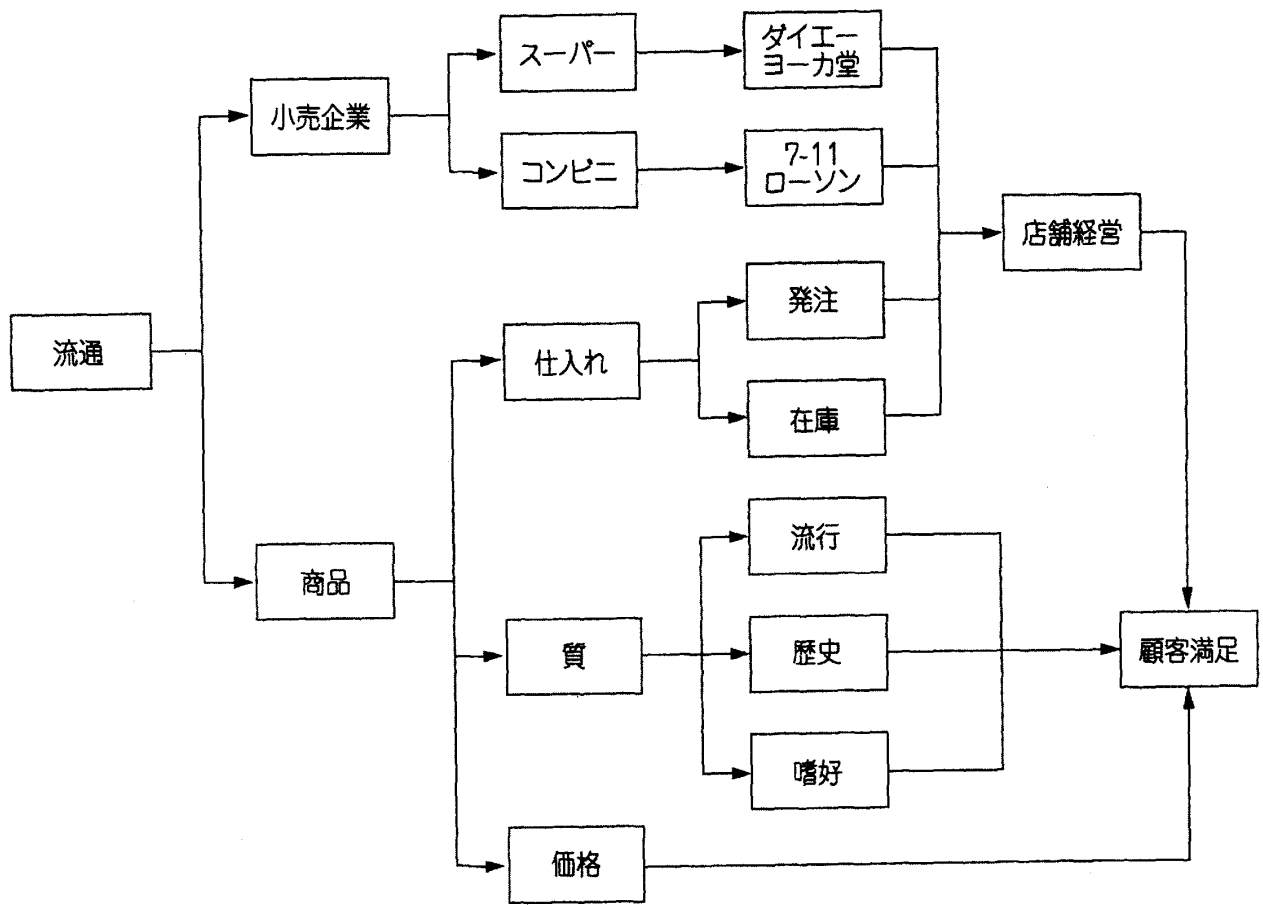
私は古代ギリシア時代のファッションが興味深かった。なぜならその時代の服装は、たった一枚の布を二つに折り、間に身体をはさんで肩で帯め帯をする、というただそれだけの衣服であるのだ。しかしそのドレーパーが、多彩な表現を見せるのである。後世の衣服は、身体を包むというより身体の上に構築されるというほどのファッションが流行している。

それに反して古代ギリシアのファッションは、体の形に合わせて調整し縫うということはない。この単純な構造があるがゆえに、かえって自由自在な表現が生まれるということを感じた。私は服飾の原型は、この古代ギリシアにあると感じた。

(参考文献)

とくになし。

c. ブレインストーミングの最終段階 : Step 3



阪田・Larke 1998